

◆『Intelligence』購読会員の皆さまへ：ニュース・レターNo.52（2018年1-3月号）◆

ニュース・レターの発行がしばらく滞り、新年明けてからのご挨拶が遅くなりましたが、皆さまにおかれましては、新たな年度のはじまりを迎えられ、いかがお過ごしでしょうか。最近のニュースでは、中国の習近平主席と北朝鮮の金正恩最高指導者の会談が伝えられ、4月27日には南北朝鮮首脳会談が予定され、トランプ大統領が北朝鮮の金正恩と会談するという事です。いよいよ朝鮮半島が動いておりますが、日本は一人蚊帳の外のように残念です。さて、次号『Intelligence』第18号は、4月28日の研究会前には皆さまのお手元にお目見えする予定です。その次の19号の投稿原稿も募集しております。締め切りは、毎年9月末です。投稿をご予定の方は、事務局まであらかじめご連絡頂ければ幸いです。

ご愛読の会員の皆さまには、ニュース・レターとともに「Intelligence」会員専用ウェブサイト <http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> また、会員向けブログとあわせてご覧いただければ幸いです。皆さまからのご意見、ご要望をお待ちしております。

【ブログ用エッセイ募集】 会員向けブログでのエッセイは、お楽しみ頂いていますでしょうか。現在第23回の羽生浩一さんのエッセイまでネットでご覧頂けるようになっています。いろいろな方の研究上の興味深い逸話をご執筆いただいております。このブログのエッセイの執筆希望者を、購読会員の中から募っております。研究関する小話やヒント、資料紹介などを会員向けブログに掲載なさりたい方は、お原稿をお待ちしております。原稿の長さは千字程度、写真を二葉そえてご提出下さい。詳しいことは、事務局までご連絡下さい。

【第116回研究会】（12月16日（土）午後2時30分～5時30分）

・天野知幸（京都教育大学教育学部）「引揚文学における「ソ連」表象」占領期に引き揚げてきた作家たちの作品におけるソ連に関する表現について、ご報告頂きました。

・本田晃子（岡山大学社会文化科学研究科）「ファクトからシミュラクルへ：『全線』に見るソフホーズの形象」は、1920年代のソ連映画界を代表する監督エイゼンシュテインの1929年『全線』における農村やソフホーズの描き方を、実際の映像を見ながら具体的に分析し、当時のソ連映画における社会的リアリズムを論じて下さいました。

・靱山昌夫（神奈川県立近代美術館）「『ソヴィエト連邦建設』に見るロシア革命-1937年から1917年までを振り返る」は、貴重なグラフ雑誌の写真のグラビアを解説しながら、当時のロシア革命のイメージを示して下さいました。

【第117回研究会：国際シンポジウム】（1月27日）「貫戦期における日中映画」

科研費基盤研究(C)「貫戦期における日中映画交渉史の学際的研究」(17K02387、研究代表者アンニ日本映画大学特任教授)と合同で国際シンポジウムとして開催した。

10:00-12:00 映画上映『上海の女』（東宝、1952）の後、午後に三つの報告があった。

・王騰飛（上海電影博物館助理研究員、展示企画責任者）「身体の越境とエキゾチズム－李香蘭の死亡秘話をめぐって」は、日中戦争末期から1950年代にかけてしばしば報道された「李香蘭の死」をめぐるプロパガンダ、情報戦と、「李香蘭」イメージの変容について考察して下さいました。

・邵迎建（徳島大学総合科学部教授）「『花街』と『春江遺恨』（邦題『狼火は上海に揚がる』）－庶民／権力・宣伝」は、「花街」「春江遺恨」のモチーフが、演劇と映画というメディアを横断して流用され、あるいは作りかえられ、また中国映画と日本映画の交流、さらには中国語映画の大陸から東アジアの中国語文化圏への越境を通じてどのように継承されたかを考察して下さいました。

・秦剛（北京外国語大学日本研究センター教授）「東映動画『白蛇伝』－歴史との連続と他者との断絶について」は、中国における「白蛇伝」伝承が、満洲映画協会スタッフを吸収した戦後の東映のアニメ「白蛇伝」に於てどのようにアレンジされたか、また、原「白蛇伝」の歴史的背景が、中国からの引揚者の「大陸」イメージによってどのように置き換えられたかを分析して下さいました。

これまで黙殺され、あるいは政治的に否定されてきた 1930 年代から 1950 年代にかけての中国映画と日本映画の交渉について、中国人研究者が新たな資料を提供し、一次資料と表象の精読を通じて新たな仮説を提起するという画期的なシンポジウムとなりました。多くの参会者を迎え、しかも過半が中国語を母語とする観客でした。

なお、研究会当日に配布されたレジュメは、会員ホームページにアップされています。
<http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> をご覧下さい。

【第 118 回研究会：国際シンポジウム】

(3 月 20-21 日) 英国ケンブリッジ大学にて。

ケンブリッジ・ワークショップ「日中戦争における／に関する宣伝と報道」

(ケンブリッジ大学アジア中東研究科、早稲田大学現代政治経済研究所 20 世紀メディア研究所共催、科学研究費基盤 (B)「日中戦争をめぐる国際報道と宣伝戦」および科学研究費新学術領域研究「和解学の創生」助成事業)

Cambridge workshop: Propaganda and Journalism during/on the second Sino-Japanese War 1937-1945

以下、プログラムと報告の要旨(Workshop summary 日本語及び英語)については、下記のウェブサイトをご覧下さい。

<http://warcrimesandempire.com/blog/2018/03/20/propaganda-and-journalism-during-on-the-second-sino-japanese-war-1937-1945/>

● 4 月以降の 20 世紀メディア研究会の開催予定は、4 月 28 日(土)、6 月 9 日(土)、7 月 28 日(土)、9 月 22 日(土)に予定しております。研究会でのご報告御希望の方は、20 世紀メディア研究所事務所 m20th@list.waseda.jp まで、メールにてご一報下さい。

【カイロから観る日本】

1 月半ばから二ヶ月間のカイロ滞在を終えた。カイロの街は、空気が埃っぽいのと車の渋滞とクラクションの騒音が名物である。天気はほぼ毎日晴れだが、空気がどのくらい霞んでいるかが問題である。青い晴れ渡った空が見えれば気持ちがよいが、油断して窓を開けておくと、非常に細かい土埃が部屋の中に入り込む。朝夕の車の渋滞もひどく、皆数センチ単位で車間を詰めてくるので、大変怖い。実際通りを走っている車で無傷の車の方が少なく、私はカイロでは絶対運転できない。しかも、みな会話のようにクラクションを頻繁に鳴らす。おかげでアパートにいても、朝の 6 時頃から夜の 1 時頃までクラクションの騒音が聞こえる。それでもぐっすり眠れるようになるから人間の慣れは恐ろしい。

カイロでは、とにかく予定通りに行かないことが日常茶飯事である。エレベーターが故障している、廊下の電灯が付かないまま取り替えられない、トイレの水が出なくなった、衛星放送が突然途切れる、といった事がふつうに起こり、歩道も突然穴が開いていたり、敷石がはがれていたり、道の真ん中に標識の看板が立っていたり、いきなり道が途絶えたりする。階段の段差も均等でなかったりする。なので、カイロではスマホで歩きながらしゃべっている人はいるが、画面を見ながら歩いている人は少ない(そんなことしたら、ホントに危ない)。

こうしたカイロでの生活から観ると、日本は天国のように便利である。コンセントだって日本では差したコードがぴっちりとはまるのはあたりまえだが、カイロではゆるくて、しっ

かり接続しているのかどうか、確認しないと心許ない。列車に乗っても、時刻通りに付くかどうかは、神のみぞ知る（インシャアラー）。アパートの床や壁も平らでなかったり、角度が曲がっていたりする。タクシーに乗ったら、内側のドアノブが欠けていて無い（だから降りる時は運転手が外からドアを開けてくれた）などということもあった。こういう生活に適応するには、寛容になってゆるく過ごすしかない。日本のようにテキパキいかないからといって、いきり立っても仕方がない。何があっても動じず、切り抜けるタフさが必要である。

カイロに住む日本人は現在 800 名ほどらしいが、エジプト人は概ね親日的である。日本ではあまり知られていないが、日本語学科がある大学も三つ以上ある。ひなびた通りで、道を譲ったら、相手の男性は日本語を学んでいたらしく、「どうも」という日本語が返ってきてびっくりしたこともある。また、学生たちは日本のアニメや漫画を結構知っている。NHK ドラマ「おしん」がヒットしたのは二十年以上前で、学生たちの親が観た世代であるが、最近「ちはやふる」とか「クレヨンしんちゃん」とかアニメ「君の名は」とか、ほとんど知っているようだ（たぶん私の方が知らない）。寿司もふつうの夕食の一つになっている。最近はいくつかの小中学校で日本式教育を取り入れる活動が進められているようである。

しかし、日本では、エジプトと言え、ピラミッドに神殿にテロ、といったイメージだろう。実際には、荷物検査などがカイロ大学をはじめとしてあちこちで行われているせいか、カイロの街はまず安全だし、治安の悪いところはエジプト全体でごく一部だという。（しかし、カイロを去ってからまもなく、選挙がらみらしいが、アレクサンドリアで爆弾騒ぎがあってびっくり。）また、エジプトの世界的な位置も日本では、交流の歴史が古い割に、理解が浅いようだ。エジプトは北アフリカの一部であるとともに、中東アラブ諸国の一員であり、同時にヨーロッパが大変近い。イタリアやフランスやトルコからの品も結構入っているし、飛行機で飛べば 2-5 時間程度でたいていの欧州諸国に行ける距離である。そして地中海を挟んだ文明の興亡史も共有し、英仏の植民地にもなった。だから、学生たちも英語や仏語をはじめ欧州の言語が得意の者が多く、多数が英国やフランスやドイツに留学している。それに較べて、日本はエジプトからは遙か極東の遠い国である。エジプト人は、どちらかというといヨーロッパ人に近い目線で、日本を見ているのかもしれない。カイロから観る日本と、日本から観るカイロのすれ違いに、日本でよく言われる「国際化」ということば自体の感覚のズレを感じざるを得ない。

[3月31日付 文責：土屋礼子]